

する最悪なシナリオのストーリーを患者に作成させてそれを読んで録音して何度も聞いてもらう方法)についても、同様に推奨している。一方、以前と大きく異なる点は、治療の頻度と期間である。本書では2週間1回、計20回弱の外来治療であると説明している。これは、一般の治療機関でも実施しやすい点で、以前の集中治療と比べて一見現実的になったようにも見えるが、ERPを施行していくうえでの治療効率は果たしてどうなるかには興味がある。ERPは患者がこれまで避けてきたことに直面したり、習慣化している強迫行為をせずにすませる治療であるため、アグレッシブな治療であればあるほど、治療者のたたみかけるような熱意や圧力や説得力を要するものと思われるからである。ERPへの躊躇や抵抗をみせる患者に対して2週間に1回の外来治療でERPへの理解や積極性を高められるかどうかは知りたいところである。

本書では、躊躇、抵抗を示す患者に対して「やる気になるまでは一旦中断しましょう」というシビアな対応を勧めている。総論的には正しいし、私もある程度このような対応を行う時があるが、極端すぎるとすぐにドロップアウトしてしまうのではないかと私は考えてしまう。また、本書では、反応妨害の程度を緩めることが治療効果の上でとてもマイナスであると強調している。これも総論的には正しい。ただ、患者のモチベーションを維持し、治療を継続させるためには、ある程度反応妨害を緩める過程も一時的に許容すべきではないかと個人的には思っている。

本書での対応でうまくいく場合もきっと多いと思われる。これには、日本と欧米の文化の違いや保険診療や医療システムの違いに負うところも大きいのではないかと考えている。

このようなことを考えながら本書を読むととても面白いと思う。このまますぐに役立てられる実践書というよりも、今の読者の臨床現場と比較して考えながら読むべき本であるかもしれない。

また、気になる点としては、この本の対象のOCD患者は、監訳者の一人である松永先生のいうcognitive typeのOCDであり、motoric typeを含むERPが効きにくいタイプ(私はnon-cognitive typeと称している)に関する言及がほとんどみられないことである。これを意図的に言及しなかったのかそうした患者があまり来ていないのかも興味深い。

最後に、実践的なマニュアルとしては、九州大学行動療法研究室を中心に作成した厚生労働省のマニュアルもよくできていると思う。それと比較しながら本書を読むのもよいであろう。

原書：Edna B. Foa, Elna Yadin, Tracey K. Lichner：Exposure and Response (Ritual) Prevention for Obsessive-Compulsive Disorder, Therapist Guide, Second Edition

Treating Your OCD with Exposure and Response (Ritual) Prevention, Workbook, Second Edition

意識と無意識

ETHレクチャー第2巻 1934

C・G・ユング著

エルンスト・ファルツェーダー編

河合俊雄監修、猪股 剛、

宮澤淳滋、長堀加奈子訳

創元社、A5判224頁、4,400円、2024年6月刊

(京都ヘルメス研究所・京都大学名誉教授) 山中康裕

本書は、先に発刊された、第1巻『近代心理学の歴史』に次ぐ、第2巻である。

フロイトとの決別以降、しばらくは、いろいろ苦闘しながら臨床に従事していたが、ナチス・ヒトラーの台頭以後、一度はアカデミックな世界から完全に身を引いたユングが、ETH [Eidgenetische Technische Hochschule：スイス連邦工科大学]に教授として招かれ、そこで、1933～1941年の9年間にを行った連続講義の内の、1934年の講義の全貌である。

前巻が「近代心理学の歴史」、本書が「意識と無意識」というタイトルのもと、ファルツェーダーによって纏められた。まさに、評者が生まれた年に終結した連続講義であり、空間は共有してはいないにせよ、時間をまさに共有したことは、評者にとって、とても意義あることであり、ユングどころか日本にそれを伝えた故・河合隼雄京都大学教授もおられない今ユングにつながる生字引たることを自認する評者にとって、大切な根拠の一つである。

本書は、評者の教え子・猪俣剛君と、さらに後発の宮澤淳滋・長堀加奈子さんが訳し、故・河合隼雄教授の子息・河合俊雄君（彼も、何と、今や京都大学を定年退官して名誉教授なのだ）が監修し、「まえがき」を書いている。そうした形式的な御託はこれですが、猪俣君が「解説」で書いているように、「ユングの口吻がそのまま伝わる」しかも、「ユング自身によるユング心理学」の解説なのであり、それはこれ以上ないと言ってよい「素人にも分かりやすい講義内容」なのだ。しかし、歴史的に言って、このような大切な意義を持つため、実に詳細な講義録や註やら文献やらが徹底的に添付されているため、一見すると、とても素人向きの解説とは見えないしろものになってしまっているのである。講義録そのものも、現地でのスイス・ドイツ語によるものは、講義に直接参加していたエドアルト・シェドラーと、リプカ・シェルフによるものを基としているが、彼らはあまりに忠実に筆記することに徹して、かえって時々中断せざるを得ず、また、誤記もしたりしているため、バーバラ・ハナとエリザベス・ウェルシュによる英語版謄写版ノートから、ファルツェーダーによって補填してある。つまり、現在得られる最高度に忠実な「ユング自身の講演録」なのだ。

このETHの大講堂には、評者も、あれはグライ・ラマの講演だったが、臨席したことがあり、一階は超満員、二階のバルコニーも人があふれていた。ユングのこの講義も、学生のみならず、一般参加も認められていたので、常時、400人から600人の聴衆が押し掛けた、ということである。

原書：Carl Gustav Jung, Ernst Falzeder (Ed) : Consciousness and the Unconscious : Lectures delivered at ETH Zurich, Volume 2, 1934

ヒトは嗜癖する

共依存から性暴力まで

斎藤 学著

金剛出版, 四六判 360頁, 3,960円, 2024年7月刊

(埼玉県立精神医療センター) 合川勇三

著者は日本の依存症臨床において大きな役割を果たしてきた。特に1996年に出版された『アダルト・チルドレンと家族一心のなかの子どもを癒す』（学陽書房）はアダルトチルドレンブームを引き起こした。30年近く前になるが、本屋に平積みされていたことを思い出す本である。

さて、本書は著者が行ってきた臨床活動に関わる観察、資料、分析、考察などを1冊の本にまとめたもので、主に『アディクションと家族』『子どもの虐待とネグレクト』誌に掲載された論文を改変・改正したものである。

第1章の「『共依存』再考」では共依存という概念が成立した歴史について述べた後、共依存と精神分析との関連について述べられているが、精神分析の基礎的な知識がなければ難解な部分がある。また認知行動療法については、現在の依存症治療では一般的に行われている治療法だが、著者は「CBTは薬物投与との関連を前提にしており、その効果が実は医師（治療者）・患者間の転移関係にあるかもしれないことをあえて無視して成立している」と批判的である。

第2章以降では家族問題を中心にして、児童期の性的虐待や近親姦を含む虐待、PTSD、解離性同一性障害、摂食障害について述べられている。提示されている症例は、非常に興味深いものが多い。特に児童期に虐待を受け、解離性同一性障害を来している症例などは、治療が困難であり、自分の診察室には登場してほしくないような患者が多い。第9章「男性のセクシュアリティと攻撃性」では殺人事件を起こした犯人の著者の精神鑑定について書かれている。すさまじい生育歴であるが、「児童期の非虐待体験の逆再上演として噴出した結果」犯行時の攻撃性が生まれたと著者は述べている。虐待の影響がこれほどまでに大きいのかと驚かざるを得なかった。